

年間第 21 主日

ヨハネ 6:60-69

2012 年 8 月 26 日

イエズス会助祭 小暮康久

今日の福音では、二つの異なる弟子たちの姿が描かれています。一つは、イエス様の元を離れ去っていく多くの弟子たち、もう一つは、イエス様の元に留まるわずかな弟子たちです。この二つ、つまり「離れ去る弟子」と「留まる弟子」の違いはどこにあったのでしょうか。彼らを分けたものとは何だったのでしょうか。弟子たちの姿とは、私たち自身の姿でもあります。ですから、今日の福音に描かれているこの二つの弟子たちの姿は、私たち自身が直面している現実でもあるということです。私たちがイエス様の元に「留まる弟子」でありつづけるために必要なこととは何なのでしょう。今日はこの点について一緒に味わってみたいと思います。

まず「離れ去る弟子」たちです。

「わたしは、天から降って来た生きてパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生きるためのわたしの肉のことである。」これは先週の日曜日の福音箇所の中のイエス様の言葉ですが、離れ去っていった弟子たちの多くは、この言葉を聞いて、「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」とつぶやき始めるのです。何故、つぶやきはじめてのでしょうか。これまでのユダヤ教の枠組みの中で、こんなことを言った人などは一人もいなかったからです。イエスを預言者の一人として理解する人々にとっては、きっとこの言葉は理解不能なひどい話しか聞こえなかったでしょう。なぜなら預言者はどんなに偉大であっても人間に過ぎないからです。預言者は、「主はこう言われる。…」と言って神の言葉を民につげる、いわばメッセンジャーに過ぎないからです。自分自身のことを「世を生きるための、永遠の命を与える、天から降ってき生きてパン」などと言った預言者など一人もいないからです。もしかしたら、聖書についての知識が豊かな者ほど、「こんな出鱈目なことを言う預言者は聞いたことがない。」とそんな風に心の中で呟いていたかもしれません。彼らはこの目の前のイエスの中に人間を超えるものを見出すことが出来なかったのです。

これに対してイエス様は、続けるように「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」と言われます。しかし、「離れ去る弟子」たちは、「わたしの言葉は霊であり、命である」というイエス様の言葉を受け取ることができません。イエスの中に人間を超えるものを見出すことが出来なかったからです。言い換えれば、人間を超えるものとしての「救い主キリスト」であるイエスに出会うことが出来なかったのです。

しかし、「留まる弟子」であったペトロは違いました。「この目の前のイエスという人は誰であるのか? …人間に過ぎないのか?」きっとイエス様との初めての出会いの日から、ペトロはいつも問い続け、この問いの中で何かに出会っていた、何かを体験していたはずです。だからこそ、「イエスは誰であるか?」というこの根本的な問いに対して、「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」

と答えることができたのです。イエスの中に人間を超えるものを見出していた。人間を超えるものとしての「救い主キリスト」であるイエスに出会っていたということです。

このように「離れ去る弟子」と「留まる弟子」の両者を分かったのは、「イエスは誰であるか？」という根本的な問いに対する「理解」の違いでした。そしてこの根本的な「理解」の違いは、弟子たちのイエスに関する「体験」の違いに起因していました。この根本的な「理解」と「体験」の関係を、今日の第一朗読のヨシュア記はよく表していると思います。

ヨシュア記の最後の章にあたる今日の箇所は、ヨシュアの告別の言葉とそれに対するイスラエルの民の応答という文脈にあります。「もし主に仕えたくないというならば、川の向こう側にいたあなたたちの先祖が仕えていた神々でも、あるいは今、あなたたちが住んでいる土地のアモリ人の神々でも、仕えたいと思うものを、今日、自分で選びなさい。ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます。」と告げるヨシュアに対して、イスラエルの民は、「主を捨てて、ほかの神々に仕えることなど、するはずがありません。わたしたちの神、主は、わたしたちとわたしたちの先祖を、奴隷にされていたエジプトの国から導き上り、わたしたちの目の前で数々の大きな奇跡を行い、わたしたちの行く先々で、またわたしたちが通って来たすべての民の中で、わたしたちを守ってくださった方です。わたしたちも主に仕えます。この方こそ、わたしたちの神です。」と答えるのです。

イスラエルの民にとって、神は具体的に体験し、出会って、そして知った神です。抽象的な神概念としての神ではなく、「この方こそ、わたしたちの神です」と具体的に告白することのできる神だったのです。自分たちの具体的な体験の中で、出会って、そして知った具体的な神だったのです。そして、イスラエルの民はそれを絶えず思い起こしてきたのです。これが聖書の語る神であり、聖書の語る信仰です。

この第一朗読が示しているのは、「わたしにとって神はどんな方であるのか」を自らの体験を通して知るということの大切さです。「体験し、出会って、そして知った」神であることの大切さです。「離れ去る弟子」たちと「留まる弟子」であるペトロとの違いは、ペトロには「体験し、出会って、そして知った」というイエスのについての根本的な理解があったということです。ペトロの「信仰」には、この「体験」に基づく「理解」があったということです。

この「理解」と「信仰」との関係、言い換えれば「知る」ということと「信じる」ということの深い関係を、中世の偉大な神学者であるアンセルムスは、「知解を求める信仰」(*fides quaerens intellectum*)という言葉で表しましたが、彼はこう言っています。「信じなかつたら理解しないであろう。なぜなら、信じなかつたら人は体験することがないからであり、体験しなかつたら人は認識することがないからである。」

私たち信仰者にとって一番大切な「神様を知る」ということの「知る」とは、単なる客観的な情報（インフォメーション）としての「知識」のことではありません。信仰の眼差しの中で、恵みとして与えられる理解、言い換えれば、「わたしにとって神はどんな方であるのか」を自らの体験を通して知る、そのような理解のことです。そのような理解は、私たちの一番深いところに刻まれ、私たちの信仰を本物にしていきます。私たちの人生に本物の命を与えます。「あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」と告白することができたペトロの信仰は、この「知る」ということと「信じる」ということの深い関係を見事に表しているのです。しかし、そのペトロも、イエスの十字架の死の際には、

イエスを「離れ去る弟子」の一人となってしまいました。イエスの「復活」をペトロはまだ体験していなかったからです。本当の意味でペトロが「イエス・キリスト」を知るのは、この「復活」の体験においてだったからです。

私たちが、「この方こそ、わたしの神です」と告白することができるためには、日々の生活の中で、私自身が「体験し、出会って、そして知った」神である必要があります。体験を通して知り、知ることで深まる、これが聖書の語る信仰です。私たちがそのような信仰を生きていく恵みを与えられるように、この御ミサを通して共に祈ってまいりましょう。